
どざえもん戦記

シモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どぜもん戦記

【Nコード】

N0456V

【作者名】

シモン

【あらすじ】

むかし昔、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいたそう
な。

ある日、おじいさんが山へ行くと、とっても不思議な事が起こり始める。

おじいさんが見つけた少女の正体とは？

ぶろろおぐ

ぶろろおぐ

むかし昔、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは川へ洗濯に、おばあさんは山へ芝刈りに、と、両方で反対の事をしておりました。

だから、よおーく近所の方達に、こう言われるのでございます

「さすがにあのおばあさんの腰じゃあきついんでねえかい。じいさん、かわりにいっておやりなよ。」じいさんは次の日、しぶしぶとかわりにいってやりました。

「ありや、こんな所に竹の子なんてはえていたんだべな。最近山に来てなかったからもうわかんね。」

といいつつ、じいさんは手土産に、と竹の子を引っこ抜こうとしました。

「そおーれ!!」

じいさんには似つかわしくない声を張り上げました。

ぽおん。

思いの外、竹の子はするつと抜けました。

「うおつととと・・・。」

じいさんは重心をくずし、どしんと尻餅をつきました。

「あいててて。な、何だ、これは!」

見ると、竹の子はただのはりぼてでした。

抜けた穴からは黄金の光がもれています。

「こ、これは・・・?」

じいさんは穴をのぞき込みました。

ころん。じいさんの懐に入れていたおむすびが穴の中に落ちてしまいました。

「あああああつつ！！！」

じいさんは手を伸ばしました。

「だめだよ」

だれかが腕を掴みました。

じいさんがはつと後ろを振り向くと、そこには姫カットの少女がたつていました。

「そこは欲望の空間」

「は？」

少女は座りこみました。

「これは貴方が創った欲望の空間。だから入ると貴方はきつと出てこれなくなる。」

じいさんはなにやら興味を持ち、座って話を聞きました。

「この竹の子も貴方が昔食べたかったもの。お金も貴方が最も欲しがっていたもの。そして」

すつくと立ち上がり、じいさんを見ていったのです。

「私、子供も欲しがっていた。そうでしょ？」

じいさんはこくんとうなずきました。

すると、穴から出ていた光がふつと消えました。「あ・・・？」

じいさんは不思議で思わず言いました。

「欲望が消えたんだわ。」

そして、じいさんを見つめると、ふつと笑いました。

「私はどざえもん。今日から貴方の子供よ。」

そして、どざえもんはじいさんの養女になりました。

じいさんは大喜びです。

ところが、ばあさんはどざえもんの名前が気に入りませんでした。

「炎はどうかね？」

じいさんは何でもいいよ、と気前良く言ったので、ばあさんは決めました。

「炎が元気にすくすくと大きくなりますように。」ばあさんとじいさんは、その日、誓ったのでした。どざえもん（炎）を、大事に育

しるすにんじやぞ。

ぶろろおぐ（後書き）

これは、日本の色々な昔話を練り込んで作り上げた話です。
ご愛読してください。

壱 鬼の噂

「行ってきます、おじいさん、おばあさん」

どざえもんは、早朝、山へ木の実を採りに行きました。

どざえもんは桜色の緋の着物を着ていきました。「あ、モモが生ってる」

と言って、6つモモを採りました。

また違うところには野苺、また違うところには、見たことのない小さな実がたくさん生っていました。

「美味しそう。食べてみようかな。」

とつぶやいて、ひとつ採ろうとしました。

が、その瞬間。

風を斬る音が聞こえ、いつの間にかどざえもんの背中からは血が出ていました。

「っ……っ……」

どざえもんはバランスを失い、ぐらりと倒れました。

「……っ……だ、誰……?」

どざえもんは道ばたにうずくまって、唸りました。

と、そのとき。

「我の糧を横取りするのは見逃せられんな。」

どざえもんの目の前に、少年が立っていました。そして、木の実を入れていた籠を奪い取りました。

「たっ……食べないで!それはおじいさまの……」

言い終わらないうちに、籠は空っぽになってしまいました。

「ん?何だよ。人の食料を取って自分のは駄目なのか?」

「まだ食べてないわ……。触れてもないのに……」

そういうと、少年は顔を真っ赤にし、食べかけていたモモを放り投げました。

「はっ、早く言えよ！」

「あんたが斬りにきたのよ・・・」

その言葉を吐くと、あまりの痛みに気を失いました。

「・・・むら、ほむら！」

「ん・・・お、おばあさん！」

「やっと気づいたかね？ああ、良かった・・・。」

おばあさんは傷を治療してくれていました。

「おばあさん、あたし・・・何故ここへいてるんでしょうか・・・？」

どげえもんはゆつくりと起きあがり、聞きました。

「ああ、倒れている炎を見つけて、山から帰ってきたのさ。炎より少し年下の男の子だったかね。」

どげえもんはびくつとしました。

あの偉そうな男の子だと瞬時に分かったからでした。

「名前を、たしか・・・ああ、さえき牙鬼と言ってたよ。」

牙鬼・・・か。

「そうそう、炎！最近あその山で鬼が出るんじやと。炎も鬼にやられたんじゃないのかい？」

「鬼？」

「そう。最近あそこで子供が次々と殺されていてなあ。」

「まさかとは思うが・・・」

「あの」

心当たりがあるのです、と言おうとした。

「ああ・・・炎が死ななくて良かった・・・」

おばあさんが泣いていました。

「恐いですね。」

夜10時頃。

（鬼って 結局あの男の子じゃないの？）

頭からあの話題が離れず、眠れなかった。

（ああ…今日は疲れたから明日 探そう……。 ）

そう思いながら、どさえもんは目を閉じたのでございまして。
深い、深い眠りにつくために……。

壱 鬼の噂（後書き）

あー、やっと炎以外のレギュラーキャラが出てきました。
とりあえず話が進む様になります。
次話も読んで下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0456v/>

どざえもん戦記

2011年7月20日18時03分発行